

第十四条 二つ並び・三つ字

底本…高知本 対校本…なし

【翻刻】

第十四 二つならひ三つ字

これハ文字二つも三つもならひたる所お*ヲし。心得ぬ人の謡を聞に、たとへハ蟻通に「花のうちの鶯又秋の蝉の
さんの声」、是「の」、字、初二つ後三つ有也。初よりのちまで、ミな「の」、字にあたつて以之外せハしくうた
はせ給事、おかしく侍る。

籠太鼓「恋と云事も。うらみといふ事もなきならひならは^大_中」

此「云事も」の「も」の字、初の「も」の字ハ中音に吟し、後の「も」の字ハ引さけてうたふへし。又「なき習ら
ひならハ」の「な」の字、三つ御座候。初の「な」の字大きに吟し、中の「な」の字、中音にのへて商の曲にて吟
し、後の「な」の字、呂音にやハらけてつゝまやかに吟すへし。あらしきこまか成き、やうハ、かやうの所にてしれ
申事也。かりそめなから、さしあたつてハ是程の事もうたひにくきもの也。しかるによつて、毎度ある謡を以てこ
れを書進上いたし候。

野の宮「森の木の間の夕つきよ陰かすかなるこの下の。くろきの。鳥居の二柱に立かくれてうせにけり跡立かくれ失にけり」

此所ハ殊に二はしらの曲と申て大事之口伝有。大ていは二柱の所ハするりとよくうたハれぬ所也。「森の」と云所より、五つの「の」、字それく心を付す、めつたと謡てハ二柱にかくれにくし。

三井寺「先初夜の鐘をつく時ハ。諸行無常と響也。後夜の鐘をつく時ハ。せしやう。めつほうとひく也。しんしやうのひく、きハ。生めつくくに。入相ハ」

右此四つの「ハ」の字、いつれも曲あり。別々の吟しやう也。熟得玩味有へし。さりながらあまりにうまくうたふへからす。

*底本では「ほ」をミセケチとし、「ヲ」を傍記。

*底本では「く」をミセケチとし、「き」を傍記。

【校異】

対校本なし。

【語釈】

○あたつて…対応して。「あたる」は、事に当たる、対応・対処するなどの意。謡には、裝飾音的な小旋律型としての「アタリ」も存するが、ここでは一般用語として解釈した。

○曲…能楽伝書においては、「きょく」「ふし」「くせ」等と読まれる語。本条では小単位の「節（ふし）」を意味するか。【解説】にて後述。

○つゞまやかに…小さく。「約やか」は、縮まって小さい、こまごまとしている、簡略、簡潔、質素、つつましい等の様々な意を持つ語。ここでは直前の「大きに」「延べて」といった表現に対応する「小さい」の意を採用した。○き、やう…巧み具合。巧みである、上手である、を意味する「利く」に、動詞の連用形等に付いて、…の仕方、…具合、といった意を示す「様」を伴った語。

【現代語訳】

第十四 二つ並び、三つ並びの字

これは、(同じ) 文字が二つ、三つと並んでいる所が多いことについての条です。謡について心得がない人の謡を聞くと、例えば〈蟻通〉には、「花のうちの鶯又秋の蝉のきんの声」と、「の」の字が前半に二つ、後半に三つあるのです。これを最初から最後まで、すべて「の」の字に対応して、たいへんせわしく謡われるのはおかしなことであります。

籠太鼓「恋と云事も。うらみといふ事もなきならひならは」^大
中

この「云事も…」の「も」の字、初めの「も」の字は中音で謡い、後の「も」の字は音を引き下げて謡うべきです。また、「なき習らひならハ」の中には、「な」の字が三つございます。初めの「な」の字は大きく謡い、真ん中の「な」の字は中音で延ばして商の曲で謡い、最後の「な」の字は呂音にやわらげて、小さく謡うべきです。粗いか、細かいかの巧み具合は、このような箇所の人に知られてしまわれるものです。些細ではありますが、この程度のことでも、咄嗟には謡いづらいものです。そうであるので、よく謡われる曲を例えにこれを書いて、進上申し上げ

げるのでございます。

野の宮「森の木の間の夕つきよ 陰かすかなるこの下のくろきの鳥居の二柱に立かくれてうせにけり跡立かくれ失にけり」

この箇所は、とりわけ「二柱の曲」と言いまして大事な口伝がある。大方、二柱の箇所はするりと滞りなく謡われない箇所である。「森の」という所から、五つの「の」の字それぞれに気を付けず、軽率に謡っては(シテは)二柱に隠れにくい。

三井寺「先初夜の鐘をつく時ハ諸行無常と響也 後夜の鐘をつく時ハせしやうめつほうとひ、く也 しんしやうのひ、きハ生めつゝに入相ハ」

右の(謡にある)この四つの「は」の字には、いずれも節の変化があり、別々の謡い方である。よく理解して味わいなさい。しかしながら、必要以上に上手に謡うべきではない。

【解説】

謡の短い一文中に、「な」「の」といった同じ字が、二つ、三つと連続している場合の謡い方について記したもの。なおこの一字は、文中の例にある通り、「秋の蟬のきんの声」(蟻通)と助詞である場合、また「なき習らひならハ」と、語頭の一字である場合とがある。

作者は、このように重なっている一字を全て意識して謡うことを戒めた上で、個別の事例「恋と云事もうらみといふ事もなきならひならは」(籠太鼓)を挙げて解説している。まず、並列の「も」について、初めの「も」は中音、後の「も」は音を下げて謡うべきであるとする。また、本文に「大」「中」「延」との傍注がなされた「なきならひならは」の三つの「な」は、初めは大きく謡い、次は延ばして、「商の曲」で、最後は呂音にやわらげ、小さ

く謡うよう述べる。なお、この本文内容から、原文に付されている「延」の傍注は、現状の「くならば」の「は」ではなく、「な」の横に付すべきものであったと考えられる。

右の箇所の問題になるのは「商の曲」が示す意図がどういったものか、という点である。例えば「金春流曲法秘伝書（延徳二年「二四九〇」常門彦次郎相伝元安音曲伝書）」（早稲田大学演劇博物館蔵）には、「商ハ上の文字につよく当て、下の字をあらためずしてあきなひてゆく故に、商と是をいへり。たとへハ、やあの心なり。能々習べきと云へり。」との一文がある。また、本書『うたひ鏡』第五条「呂律のこと」の文中では、「律商（シヤウ）と云曲、律羽と云曲有。律商と云曲ハすぐに云くたすうちに、またいひやハらくる所有。是を律商の曲といふ也。」との説明がなされている。本条の中でも、真ん中の「な」を「商の曲」で謡い、最後は呂音にやわらげる、とあるので、ここという「商の曲」とは、はじめは強く出て、その直後から言い和らげていくことを指すものかと推測される。

「曲」という語は、能楽伝書において、「きよく」「ふし」「くせ」等と読まれる。能の小段としての「曲（くせ）」以外の「きよく」「ふし」に関しては、文脈からの判断が難しい場合もある。「きよく」が、作品全体といった大きいまとまりを指すのに対し、「ふし」の方はそれよりも小単位と考えれば、二つ並び、三つ並びの字について述べた本節における「曲」は、後者の「ふし」と解釈できる。

本条は、敬語表現を多用して「これを書進上いたし候」で結んだ前半と、敬語表現のみられない後半とに二分される。敬うべき身分である人物に宛てた前半部分に、付加すべき内容を後から書き足してまとめたとも考えられる内容である。本資料の成立事情を考える上で、注目すべき点であるといえよう。

なお、「三つ字」について触れた謡伝書は、他に「混沌懐中抄」（塵芥抄）「謡之秘書」等がある。「謡伝書の具体的理解と体系的把握へ向けた基礎作業」【演劇博物館所蔵謡伝書の翻刻データ公開】（<https://rcjm.kcu.ac.jp/pub/2017web/archives/resarc/utai/index.html#honkokudata>）掲載のテキストデータを利用し、該当箇所を以下

に引用しておく。

一 三の、といひてよの字二ツつ、をきての、字ハはしめハあかり中ハさけのちハすくなるへし たとへは
りつきうのふんたいのかんしよくの かやうのたくいなるへし

19349〔混沌懐中抄〕イ11-00608（永正三年（1506）七月吉日（金春八郎）秦元安）

一 三のの、事

けにや六宮のふんたいの顔色のなきも 始はうゑ、つく 二めおつる 三めすくなり

一 たけくらへの事

けんりうやうやく茂る木の花のうちの鶯又秋のせみの吟のこゑ 上中下と云 同所へ行事たけくらへ也
是を三ののと云人在之 た、し懐中抄にハ始在之

19350〔塵芥抄〕イ11-00294

一 たけくらへ 秋の蟬の吟の声

一 三ののの事 六宮のふんたいの顔色の

19357〔謡の秘書〕イ11-00349（慶安五年松島市郎兵衛開板）

※版本19362〔諷極秘伝書〕イ11-00342（貞享二（乙丑）年八月吉日 須原屋

茂兵衛板行）にも同様の記述あり。

（田草川みづき）